

これを一農家当りに割出してみると、1,032,705 円になり、いわゆる7桁農家になっている。

前述の事柄により、この地域が現在のようが高冷地大根の生産地になった理由をまとめてみると次のようになる。

○災害による転換（27-29年）

主穀農家から、自然条件に合つた商品作物栽培への転換になつた。

○道路の整備（27-28年）

開拓道路よりは、むしろ国有林の林道が開かれ、整備されたのであるが、この道路の整備によつて、作物が荷いたみせず、短時間で出荷できるようになつた。

○農協の成立（30年）

出荷体制の確立と販路の開拓がなされ、大根の出荷が伸びた。

○開拓政策の変化

開拓政策の変化を敏感に感じとり、作付の変化を持たらしている。

○地理的位置

高冷地にあるので、暖地とのより早く出荷出来、市場確保に有利であつた。

東京市場までトラックで5時間以内に出荷出来る事などの有利性を持つている。

以上の要素が相互に関係しつゝ、今日の作付状況を持たらしめたものと思われる。高度に商品化された大根が転換期に来ているこの地域では、今後酪農を取り入れ、牧草畑と大根畑との循環を行うか酪農に活路を求めるであろう。

鳴門の地理学的考察

三好 妙子

鳴門の地域性を明らかにする為に、地形と土地利用、及びこの地を占める地理的位置を軸として種々の調査を試みた。本論の構成は以下の如くである。

第一章 地域の概略

① 地域内の自然環境（地形、地質、土壌、気候 *etc*）

② 地域内の人文環境（市の変遷、人口 *etc*）

第二章 地形と土地利用

① 地形分類（山地、河堤、堤内低地塩田、干拓地 *etc*）

② 土地利用、地形との関連に於て（概況、塩田、水田、畑、果樹園）
第三章 鳴門の占める地理的位置。

第四章 結論

鳴門は、気候的には瀬戸内式気候に属し、（年平均気温 15.9°C 年平均降水量 1376mm ）地形は *Cretaceous* の和泉砂岩より成る山地と沖積低地より成る。低地は海の影響による海岸付近の砂地と旧吉野川の作用によるものとは大別されるが、低湿な所が多い。

上記の気候と地形を利用してかなり特徴のある土地利用形態がみられる。それは、浅海底と潮汐平地を利用した塩田であり、海岸の砂地を利用した甘藷畑、自然堤防上或いは、傾斜地の果樹園等々である。従つてこの地域は、塩田も含めて（面積的意味で農業に比べるとすれば）一種の *specialized Horticulture* の経営形態が取られているといつてもさしつかえない。

事實、面積わずか 87km^2 程度の狭い地域が、実にうまく利用されており、大へん有効な土地利用形態を示していることが、一つの大きな特徴である。内部的なもののから外部との関係に目を転じてみると、調査地域の占める地理的位置はかなり特徴的である。つまり、ある特定の地域が成立する要素の中には、それがすべてとは言えないまでも又多少を向わず十の面、一の面の如何をとわず、その土地の占める地理的位置といふものを無視することはできない。が鳴門の場合には、非常にうまく利用されていると言える。

○気候、地形からみた自然的位置は、塩田成立の基盤を与え、甘藷をはじめとするその他の農作物の栽培の基盤ともなつている。交通的位置は、無養老の地位に象徴される如く、繁栄→衰退→復活(→) 繁栄)と、その地位を三転した。このことは、数理的位置は不動でも経済的意味での位置の価値が、時代によつて変化しうるのであることを如実に示しており、大へん興味深い。一方、産業的立地という点では、甘藷、大根、蓮根、等の農産物がその殆んどを阪神方面を中心に出荷されていることからみても、大阪との直線距離 100km という、利点を大いに活用しているのである。

つまり、②の特徴としては、他の地域との関係で有利な所に位置し、又これを十分に活用していることが挙げられる。

この地域は全体的に積極的に物事に取り組む傾向が見られるが、その一例として、製塩に使用した石炭殻を利用した、不良地の畑地転換があげられるが、これは全国的にも珍しい人工畑である。

調査地域は、過去～現在にわたつて、種々の多様な変遷を経てきたが、現行の流下式塩田の今後の変化、及び、鳴門架橋に象徴される。将来の発展等、これからの変化が大いに注目される所である。